

三木市

吉田西向遺跡

— 主要軸道三木二日出道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

兵庫県文化財調査報告 第386号

2011年3月（平成23年3月）

兵庫県教育委員会

兵
庫
県
教
育
委
員
会

三本市

よし だ にし むかい
吉田西向遺跡

= 本遺跡は三木三日町道路改築事業に伴う開削文化財発掘調査報告書 =

2011年3月（平成23年3月）

兵庫県教育委員会

例　　言

1. 本調査は、三木市志染町吉田字西向1881-2に所在する吉田西向遺跡の発掘調査報告書である。
 2. 発掘調査は主要駿河三木三井線近隣改築事業に先立つもので、兵庫県立考古博物館・三木市木事務所からの依頼を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（現兵庫県立考古博物館）吉田調査・監・実記が担当した。
 3. 発掘調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（現兵庫県立考古博物館）吉田調査・監・実記が担当した。
 4. 発掘調査は、株式会社・櫛田建設が請負い、実施した。
 5. 調査発掘の監修者は上田昭弘氏は、株式会社リードに確認して行った。
 6. 墓地作業は、平成22年度に兵庫県立考古博物館にて実施した。
 7. 遺物写真の撮影は、兵庫県教育委員会が各回アドトヨ株式会社に委託して行った。
 8. 調査は、調査基準点とともに3箇基準点を設置しておこなった。座標は世界測地系に基づくもので、調査場は常に点に位置する。
 9. 本調査に用いた方法は座標表示法。また、座標は東京標準地図水準基準面とした。
 10. 本調査は、国土地理院発行1/25000縮尺図『淡河』を使用した。また、第4調査は、三木市発行1/25000縮尺図を使用した。
 11. 本調査に用いた遺物番号は、本文・脚注・図版とともに同一している。
 12. 本調査の監修・執筆は吉田が行った。
 13. 本報告にかかる遺物・写真・通報図等は兵庫県立考古博物館に保管している。
 14. 最後に、発掘調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々の御理解・御指導・御教導いただいた。ここに感謝の意を表するものである。
- 小原一貴・柳村正剛

目 次

第1章 地図を読みよく理解

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3節 畜産地図	3

第2章 調査の経緯

第1節 調査の概況	8
第2節 分布調査・確認調査	10
第3節 本実験調査	13
第4節 整理作業	13

第3章 調査の成果

第1節 人地区の調査	17
第2節 自然風の調査	23
第3節 まとめ	23

報告書	23
-----	----

図 目 次

第1図 三木市の位置	1	図200m S.3.01	17
第2図 三木市概要	1	図200m S.3.02	18
第3図 道路網の現況地形	2	図200m S.3.03断面	19
第4図 土壌調査断面	4	図200m S.3.04	19
第5図 前原東跡全図(西上空から)	5	図200m S.4.01	20
第6図 前原東跡部	5	図200m S.4.02	20
第7図 調査地とB区4号・5号窓	6	図200m S.4.03	20
第8図 車輪子塗地(西上空から)	8	図200m S.4.04	21
第9図 施工前の調査地(A地区)	9	図200m A地区出土土層	22
第10図 工事計画と調査位置	9	図200m A地区出土土層	22
第11図 调査調査出土通例	10	図200m B地区	23
第12図 调査調査出土層	10	図200m B地区全層	23
第13図 调査調査坑落図	12	図200m B地区平面図	24
第14図 調査前のA地区(東から)	13	図200m B地区出土土層(1)	26
第15図 A地区とB地区(東東上空から)	13	図200m B地区出土土層(2)	27
第16図 調査位置図	14	図200m B地区出土土層	28
第17図 A地区平面図	15	図200m B地区出土土層・直	29
第18図 A地区断面	16	図200m B地区出土土層(1)	30
第19図 A地区基本土層図	17	図200m B地区出土土層(2)	31

第1章 運賃を取りまく環境

第3節 地理的環境

1. 吉田西向道路

吉田西向道路は、三木市志染町吉田に所在する、吉田町向道跡の所在する三木市は、兵庫県中央部の内陸間に位置する郡である（図1-1）。

三木市は、昭和20年に三木町・別所町・福井村・口吉川町・志染町が合併して、現の三木市が形成されてきた。まことに、平成17年に、いわゆる平成の大合併により、美嚢郡吉川町を除き、現在の三木市となっている。市域の面積は178.59km²、人口は約6万5千人（平成22年1月現在）。三木カルムバードによる）である。市域は、南側から朝来にかけて伊丹市と、北側を三田市と、北西側を加古川市と、西南側の小野市と、西側を宝塚市・福良町と。それぞれ接している（図1-10）。なお、以下の記述については、町の三木市場を中心におさらい。

三木市は、室町時代に三木城が築城され、これを中心とした城下町として発展して来た。その後、戦国時代になると、領地が拡大となり、戦物の町として栄えてきた。「三木の戦物」として全国的に有名である。また、三木と有馬温泉を結ぶ街道は、前畠秀吉の三木城改めの際整備され、「湯の山街道」として、重要な内陸交通として機能していた。

近年においては、神戸のベットタウンとして神戸電鉄粟生線を中心に開発が進んできている（図1-11）。また農業では、おどうに代表される園芸栽培や、日本を代表する酒米「山田錦」の生産が盛んである。丘陵のゴルフ場や「大蔵屋年金農場施設（通称グリーンゼア三木）」「三木山森林公園」といったスポーツ・保養・研修施設も充実している。

また近年においては、志染町に「積立三木総合防災公園」「ひょうご情報公園都市」が建設され、防災・情報の拠点として機能付けられ、インフラが整備されできている。これに随い、近隣の衝突線をはじめとした道路網も整備されてきている。

吉田西向道路の調査の実績となったのも、上述施設へのアクセスの向上を目指した導車に基づくものである。

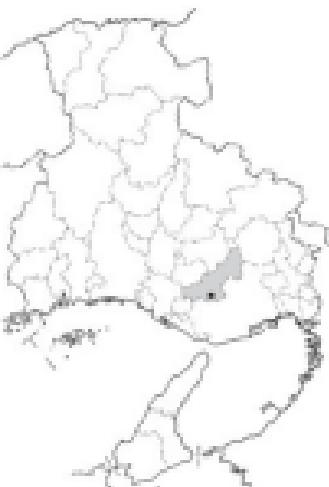


図1-1 三木市の位置



図1-11 三木市概観

2. 地形的環境

兵庫県の河川網を西北に面する加古川は、多くの河川を支流としている。その一つが美濃川である。美濃川は、三木市吉川町正法寺由いて加古川と合流するが、ここが福石川中流域と下流域の境となっている。同時に、この合流地点が三木市・小野市・加古川市の境界となっている。合流地点より奥側が三木市にあたり、この中心部を美濃川が流れている。美濃川は神戸市北区大谷町を源とし、小さな蛇行を繰り返しながら下流へと流れ、途中吉川町と合流し、吉川町へと彎がっている。また、吉川町は、神戸市北区山田町下原上を源とし、小さな蛇行を繰り返しながら西流し、志染町南駅で瀬戸川と合流後、三木市久留美で美濃川に合流している。そして、美濃川と吉川町の合流地点の西側に、三木市の中心部が開けている。

美濃川・吉川町・瀬戸川によって谷戻平野が形成され、主に稲作農地として開発されてきた。一方、これらの谷戻平野の周囲に丘山地帯が広がっている。吉川町を含む、ゾルト「大規模平野保護基盤（通称タリーンピア三木）」「三和山森林公園」「隠定三本松自然文化公園」「ひょうご情報公園都市」は、いずれもこれらの丘陵上に開発されたものである。

谷戻平野は、上記の河川により明瞭な段丘面が形成されている。段丘面との間に明瞭な段丘面によって隔離されている。まさにここで4面の段丘面が形成されている。

さらに、調査地を範囲とした南側一帯は、高級段丘面が形成されている（図3図）。西側西向丘陵の谷戻川は、この高級段丘面上に立地する。西側西向丘陵内地区が立地する高級段丘面は、美濃川の流域に形成された段丘面で、長期的に北東西方向に広がっている。地理的にはみると、美濃川に向って小規模な谷が形成されている。この結果、これらの中谷に挟まれた段丘面が、吉川町に向って蛇形上に開き出する状況となっている。この小谷の一つに、日地區が立地している。



図3図　道耕開拓の段丘地形

参考文献

- (1) 兵庫県土木部『兵庫の地質－兵庫県地質図（1：100,000）』1996
 加古川町『加古川町史 第四卷』1996

第2回 歴史的環境

1. 社会的経緯

調査地周辺をはじめ、三木市内に多くの道路が開拓され、調査も実施が行われている。特に、平安時代以前、山陽自動車道建設に伴い、古墳・廻跡・城跡等の遺跡が調査によって明らかになってきている。本稿では、調査地の存在する志染町を中心、発掘調査が行われた道路を中心化させていくこととする（図1回）。時間的には、今岡報告の中景を中心とめていくことにする。

福原塚跡群（2） 古墳（前原1号墳～10号墳）からなり、古墳群については調査が行われ、古墳が確認されている。墳丘頂と互い違いの五面墳面であることが明らかとなっている。墳丘頂で日輪・小星・星林・鹿が、直面では屏風瓦・新丸瓦・平瓦・丸瓦が出土している。古墳群についても、瓦陶器遺物である。ちなみに、今岡報告する古墳群は、1号墳と2号墳の北側に位置し、複雑な関係が考えられている。

福原大塚跡群（3） 2基（宿原大塚1号墳・宿原大塚2号墳）からなり、調査は行われていないが、古墳資料から瓦陶器遺物と考えられている。

福原大塚遺跡（3） 遺物の散在が認められ、遺跡が存在する可能性が考えられている。

福原寺ノ下遺跡（4） 旧道工事撥致高麗壁事業に伴い、平成12年（1990）間に本発掘調査が行われている。現在では、弥生時代後期と平安時代から鎌倉時代にかけての墳丘跡が明らかなことになっている。平安時代から鎌倉時代にかけての遺構としては、柱穴・土坑・本格墓が検出されている。本発掘の副葬品として、鏡頭交趾鉢・毛接ぎ・刀・刃子の出土が注目される。

福原六箇窯（5） 古墳時代の窯跡に焼く灰瓦が確認されている。

福原ノ下遺跡（6） 1991・1992年に発掘調査が行われている。

大塚下り松遺跡（8） 及丘面上で奈良時代・平安時代の備後跡が、斜面では墳跡が確認されている。

吉田御内山遺跡（C20） 以前は吉田御内山谷村・口村越路として記述されていた遺跡である。本報告と同様に、三木三井線改修改築事業に伴い本発掘調査が行われ、この結果に感づき吉田御内山遺跡と改称したものである。詳細は、「吉田御内山遺跡調査」（平成22年・兵庫県教育委員会刊行）を参照されたい。

平尾御内山武道跡（C10） 旧道工事撥致高麗壁事業に伴い、平成12年から13年に本発掘調査が行われている。調査では、平安時代から鎌倉時代にかけての墳丘跡遺物跡となるる墳丘跡が明らかになっている。

平尾本通り遺跡（C30） 与呂本通り・元通路と同じして、既述三木線改修改築事業に伴い、平成2年と平成3年度に本発掘調査が行われている。調査では、平安時代から鎌倉時代にかけての墳丘跡遺物跡を中心とした墳丘跡が明らかになっている。

平尾本通り遺跡群（40） 古墳（与呂本通り1号墳～与呂本通り10号墳）が明確されている。与呂本通り1号墳については、瓦陶器遺物であることが明らかとなっている。

図1回

- (1) 三木市立「前原2号墳は発掘調査」「三木市埋蔵文化財調査報告書－遺物分類－物語の研究－」
兵庫県教育委員会：1996
- (2) 西口圭介「前原寺ノ下遺跡－(1)三木線改修改築高麗壁事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」
兵庫県教育委員会：2004



- | | | |
|----------------------------|-------------------------------|---------------------------|
| 1：御茶ノ水通り (160050) | 9：御茶ノ水橋 + 道路 (160094~160095) | 18：西御茶ノ水通り (160061) |
| 2：御茶ノ水通り (160093~160094) | 19：二本柳通り (160080~160081) | 19：西御茶通り (160060~160061) |
| 3：御茶ノ水東京通り (160086~160087) | 20：内日本會ノ元通り (160028) | 20：御茶ノ水通り (160017~160018) |
| 御茶ノ水大通通り (160080) | 21：内日本大通通り (160029) | 21：内日本古山通り (160023) |
| 4：御茶ノ水御茶通り (160081) | 22：内日本西御茶通り (160030) | 22：御茶ノ水通り (160090) |
| 5：御茶ノ水通り (160082) | 23：内日本水道御茶通り (160031~160032) | |
| 6：御茶ノ水・Tobu (160083) | 24：内日本丸上野御茶通り (160034~160035) | |
| 7：御茶ノ水・下落合 (160084) | 25：内日本御茶の谷通り (160037~160038) | |
| 8：丸の内方外御茶通り (160085) | 26：内日本御茶通り (160039) | |

圖 1-4 地圖與道路名（道路編號）

(3) 圖 題記「御茶ノ水通り - 一般街道三本柳御茶通りの事前に作成した御茶文化園免税済み版 -」
長崎県教育委員会 (1991)

第3節 調査実跡群

1. 審査実跡群について

調査地は審査実跡群中に位置する（図9-1）。後述するように、B地区の段階については、この実跡群と密接に関連するものである。そこで、審査実跡群との関係を触れておきたい。

現在、審査実跡群については、1号～5号窓の基が開拓されている（図9-2）。これらの中なかで、調査が実施されているのは、3号窓・4号窓の周囲である。他の窓については、調査が行われていない。いずれも、出土遺物・遺構遺物から、平安時代末～鎌倉時代初期と考えられている。

また、各窓の概要は以下の通りである。

1号窓：2号窓・3号窓とともに、審査実跡群のなかでも西端。既往地図に所在する。古瓦八種類に西側する。反脚範囲である。



図9-2 審査実跡群位置（地上空から）

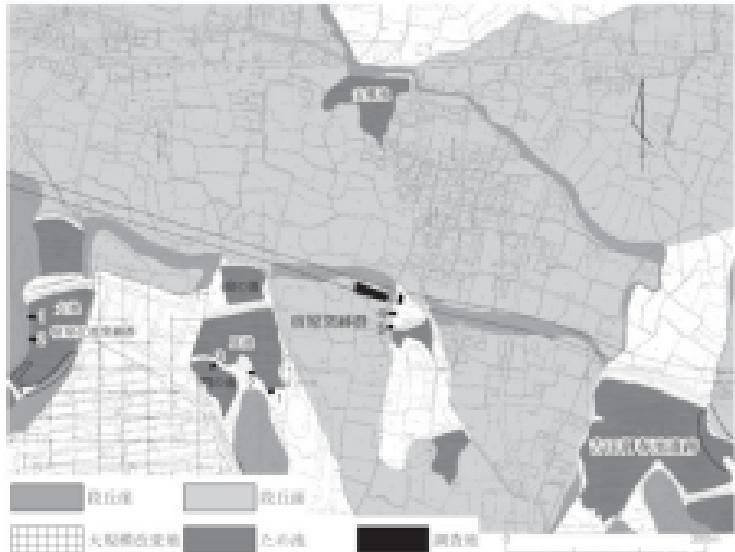


図9-3 審査実跡群

1号面：1号面・2号面とともに、宿題用紙面のなかでも西側、画面の西側に所在する。左端部東側である。

2号面：1号面・2号面とともに、宿題用紙面のなかでも西側、画面の西側に所在する。左端部東側である。

この他、1号面と看板八埋の間に、通過駆逐で調査面の設営が確認されており（1号面駆逐面地図より）、駆逐が存在する可能性が指摘されている。

2. 調査用経路・5号面

宿題1号面については、右端に隕窓整備に付いた発掘調査が行われている。この結果、1号面の存在が明かとなるとともに、駆逐が確認されている。そしてこの駆逐については、4号面の西側に位置する5号面の駆逐と見做していると考えられている（第7回）。

調査地は、宿題用紙面のなかでも、4号面の北側に隕窓する位置にある。特に日曜回については、4号面駆逐の是れである。以上から、日曜回白土遺跡は、4号面駆逐の2次埋蔵の可能性が考えられるものである。なお、本地区的調査放送から判断すると、本地区的西側に窓が存在する可能性はないものと判断される。

ちなみに、上記の調査の際、4号面駆逐の北側において、ハーフカットのトレンチが開かれ、隕窓面中段・隕窓頂が出土している。これらのトレンチと日曜回とは、平面圖は一致するものである。



第7回 調査地と駆逐4号・5号面

3. 国道の実跡

この地、宿原里地区の西側（宿原字安政10）には、南洋大通り跡地が残されている（図）。大通りの西側に1号窓と2号窓の2基が残されている。2基とも古跡顕彰面で、現存時代に保護付けられている。

さらに、宿原里跡地の東側、御春池の東岸（吉陵町吉田字御春池）で遺志園の板塀跡地が残されている（古跡御春池遺跡）。周辺に実跡が存在する可能性が示唆されている。

4. 施設実跡調査の実跡

施設実跡調査が所在する一帯は、中央設置面となっている。そして、この中央設置丘面を南北に挟み合っており開拓されている。この開拓された面もしくは斜面に施設が立地している（第9図）。現在では、この開拓面がため池として利用されている。なお、施設実跡調査についても、開拓の立場である。

参考文献

- (1) 三井松久「宿原さ可遺址発掘調査」「三木市埋蔵文化財調査報告書－昭和58年度～昭和62年度－」
三木市教育委員会：1993
- (2) 三木市教育委員会「三木市道路分布地図『三木市内道路評議分布調査報告書』」2004

第2章 調査の経緯

第1節 調査の起因

1. 工事の概要

兵庫県は、三木市志染町御厨字猪内山・御厨下西畠において主要地方道三木三田線往宅地区開発公共施設等輸送機能強化計画を計画した。当該事業は、三木市志染町に建設された独立三木総合防災公園と、三木西側となる山が交通路の整備する目的としたものである。合せて、西岸の主要地方道三木三田線が、開通内を通り見取れ狭小であることによる交通安全上の問題から、開拓計画が実現必要であった。

以上から、三木開拓から独立三木総合防災公園へのアクセス道路として、公園と山脚の自動車道三木本線インターチェンジを結ぶ主要地方道新野二木線に取り付く道路として、新たに建設が必要となることになったものである（図1-1図）。区間は、三木市志染町から同市志染町御厨屋までを目標直線的に結ぶ、約1.6kmである。なお、この区間の工事は、既設区間と並行開闢からなる。

また、上記導面に併せて、県道三島十山線の一帯についても整備されることとなった。



図1-1 図 延長予定地（西上部がC）



図1-2 図工面の調査地（A地図）

2. 工事と埋蔵文化財の調査

上記導面予定地の多くは、以前に埋場整備に伴う分杭調査・確認調査が行われ、埋蔵文化財の出発地はすでに開拓されていた。しかし、今回の事業は従来工事予定地内に埋蔵文化財が実際に位置しているのかについて、西岸、外堀調査・確認調査を実施した。

結果となつたのは、西から、昭和東調査（昭和西阿須跡）・昭和村西古谷村ノ口村城跡・高別寺本丸跡跡・西田古墳群・御厨有目遺跡の3遺跡である。この結果、御厨有目遺跡を除く2遺跡について、本発掘調査を実施することになった。本稿はこの中で、西田古墳跡の調査成績に対する報告である。



第1回 工事計画と調査範囲

第2節 分布調査・確認調査

1. 分布調査

計2度にわたりて行われている。

第1次調査 遺跡調査番号：2008273

調査地：二木町志染町西郷～西原

調査期間：平成19年3月2日

調査概要：三木三連隧道改良事業に伴う調査として行った。この結果、和田村西白谷村ノ口付城跡・高野寺本丸跡・西門古墳跡・細川町西門跡を確認することができた。

第2次調査 遺跡調査番号：2009220

調査地：三木市吉原～志染町吉原

調査期間：平成19年3月22日

調査概要：二木三連隧道改良用地開通公会堂跡等複合整備促進事業と相思志染土山隧道改良事業に伴う事業予定期内について実施した。調査の結果、遺物を探査し、埋蔵文化財が出現されている可能性が考えられるに至った。

2. 確認調査

計2度にわたりて行われている（第1回）。

第1次調査 遺跡調査番号：2009109

調査地：二木町吉原

調査期間：平成19年10月25日～26日

調査担当：山岡清朗

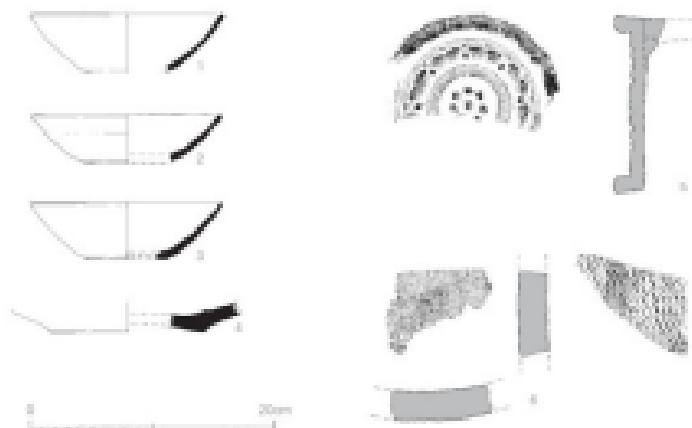


図2-10 確認調査出土遺物

調査範囲：2m×1.5mのトレンチを調査所に設定し、調査を行った。調査の結果、一帯において埋蔵文化層の位置を確認することができた。これが、本道で整備する人地区にあたる地区である。他の施設においては、埋蔵文化層の位置を確認すること叶わなかった。

なお、この確認調査の際、その特丸瓦が出土している（図10回）。当地は、すでに開墾地帯が広がりこなされたところであるため、この瓦の出土位置については、複数の余地があるものと考えている。

第2次調査 確認調査場所：308E59

調査地：三木市佐陵町吉田

調査期間：平成13年9月1日

調査担当：中川一連

調査範囲：空地の表面のグリッドを1箇所に設定し、調査を行った。調査の結果、使用の空地のグリッドにおいて、埋蔵文化層の位置を確認した。

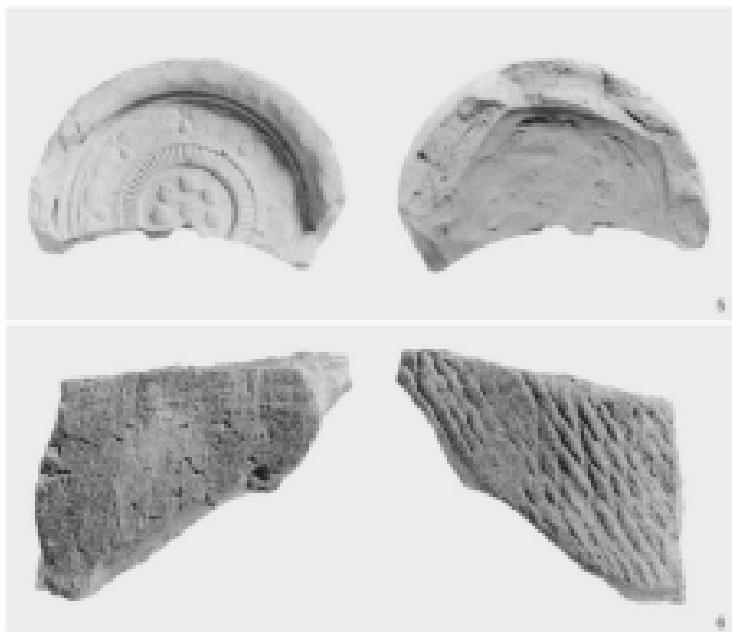


図10回 確認調査走査面



図2-2 第2次調査区域図

第3回 本施設調査

1. 調査概要

調査は、(社)三木三種線道路改善事業に伴う事前調査である。調査地は、A地区とB地区の2地区からなる(第1図、調査図)。これは、調査区域内外に未舗があり、実際には路下を確認することが不可能であったことによるものである。2地区とも、調査前は水田であったところである。特にA地区については、すでに圃場整備が完了していた地区である。

A地区・B地区の調査点を、調作上を中心にして網羅により點別測定し、以下を人手により調査を進めていった。調査終了後の昭和13年1月16日、小原ヘリコプターによる空中写真撮影を実施し、その成果をもとに現地を行った。

なお、西地区の調査面積は、A地区約13ha、B地区約18haで、計概15haである。

2. 調査体制

調査体組は以下のとおりである。

調査調査番号：2000478

調査地：三木市法政町古田

調査期間：平成17年1月29日～12月11日

調査担当：山田調査・鶴 美紀



図11図 調査前のA地区 (東側から)



図12図 A地区とB地区 (北側上空から)

第4回 整理作業

整理作業は、平成12年度に1箇年で実施した。土図の報告・復元・測量・平面測量及び、道幅測定、高差のトロースなどである。

整理体組は以下のとおりである。

整理配分団：鶴美紀一・山本一誠

調査団：山田調査

監視団：鶴 美紀・鶴 理子・鶴美紀子



図3-4 調査位置図

図1-8 A地区の断面

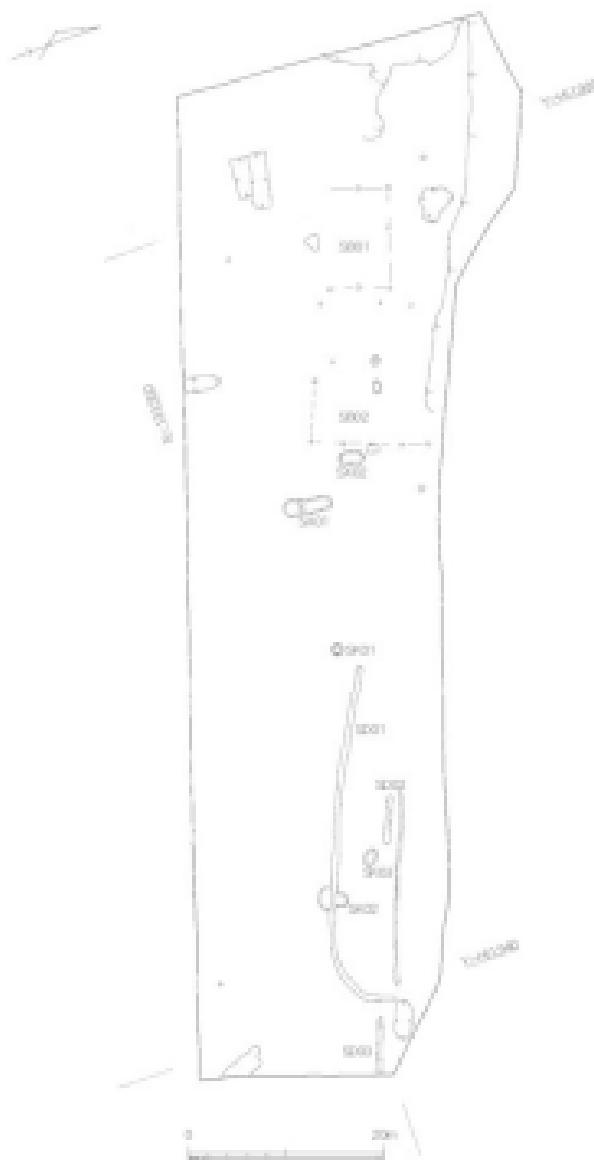


図1-9 A地区平面図



図版二〇 木製ドア

第3章 調査の結果

第1節 A地区の調査

1. 基本層序と地質の検出

A地区は高見田丘陵にある調査区である。このため、基本的に丘陵地の構造を想みるが、現地表面からの連續地質面の厚さは中央部で約50mと深い傾向であった。ただし、全ての平坦面ではなくて、南側から北側に向ってわずかに傾斜していた。このため、当地の耕作性にあたって、南側の連續性が受け、北側については、厚く土壌が形成されていた。

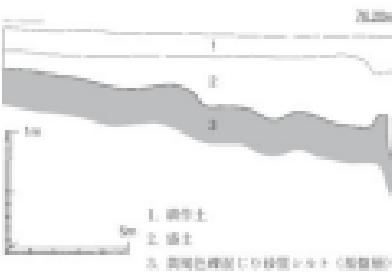


図1-1 A地区基本地質図

2. 植物遺構と古土壤物

遺構として目、固定根植物・柱穴、土坑、洞などを検出した（図1-2）。先述したように、調査地の例は、遺構面となる基層面が削平を受けていたため、遺構の検出は普通となっている。また、検出された遺構についても、浅い傾向にある。

(1) 植生柱遺構

2種（8日目・8日目）検出した（図1-3）。

3. 古土壤

調査区西手面で検出した、2箇（2箇）の古土壤物である（図1-4）。東西方向に埋蔵方向をもつ遺構であるが、東西面の大きさを矢印。ただし、他の遺構との割り合いで傾向は認められない。柱穴については、2箇であるが、もう1つあった可能性も考えられる。

遺構規模は、東面（P4-P6）で100cm、北面（P2-P4）で50cmを測り、両者各基準とした遺構の面積は、15.5cm²である。柱穴2箇の面積は、P4-P5間で1.0cm²、P5-P6間で1.0cm²を測る。北面の柱穴間の距離は、P2-P3間で2.0cm、P3-P4間で3.1cmを測る。南面の柱穴とした埋蔵方向は、N11°30' Eを示す。

柱穴の平面形は全て円形で、その直径は15cm-25cmと小型である。また、柱穴面からの距離も5cm-20cmと浅い傾向にある。柱穴、1つずつ柱穴に設けても柱面は検出できなかっただ。

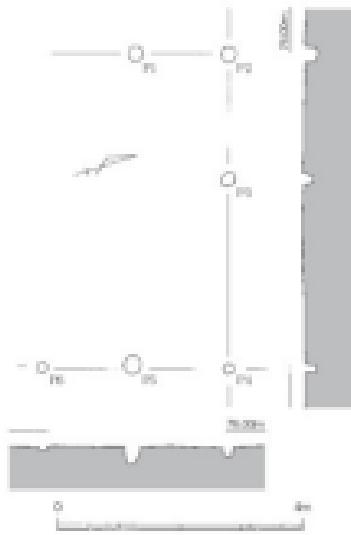


図1-2 植生柱

3.0.2

調査区西半部で検出した、東西1間、南北4間の複数建物である（図21図）。南北方向に複数方向をもつ複数で、S D01の東側に位置し、S D01と日曜地方向を約30°進める。他の面積との切り合いで面積は認められないが、西側行は検出できなかった。

建物の規模は、西側行（P1-P2）で3.00m、南側行（P2-P6）で6.00mを測り、両者を基礎とした面積は21.00m²である。また、南行の柱6箇間の面積は、P2-P3間で1.80m、P3-P4間で1.50m、P4-P5間で1.80m、P5-P6間で1.80mである。また、東側行は面積とした複数方向時、NNE-Eを示す。

建物の平面図に円形を基準とし、その面積は20m²-25m²とはば一辺している。また、検出面からの深さは、1m～2mと同程度である。いずれの柱穴は直立でも、柱面を確認することはできなかった。古墳跡か小石、土築器の小片が出土している。



図21 図 S D01

(2) 池

2番の遺構遺構を検出している。いずれも調査地の北東端を中心とした地区で検出されている。また、周囲もほぼ同面積のものである。

3.0.3

調査地先東部で検出した遺跡である。東西方向から南北方向へ、順次に検出している。S D02の初期に位置する。S E02と切り合いで面積は最も、S K02を切っている。面積とも調査区内で収束している。

検出した長さは、東西方向で約6m、南北方向で約4m、面積約6m²である。検出面における幅は約7mを測り、検出面は平行形をなす。最深部における検出面からの深度は15cmである（図22図）。底面の標高は、西端面で15.00m、北端面で15.10mと、北側へ傾斜している。内部には青瓦跡や一箇所焼瓦跡が見り残されて



図22 池 S D02

層が埋積していた。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

調査内からは、調査器の輪・環・板状が出土している。残存できたのは、環の上点（C1）である（図202）。口縁部を中心で保存する小片で、内外面とも断片化して調査により止まれている。輪は口縁部片が、環体は板状片が出土している。

S D02

調査地正東部で検出した層である。東西方向に直線的にのびる層である。S D02の北側に位置する。他の遺構との切り合いは強調ではなく、両端とも調査区内で保証している。

検出した長さは10mである。検査面における幅は27cmを測り、横断面は圓形をなし、底面は斜面である。底面の標高は、西端部でH3.5m、東端部でH3.2mと、ほぼ一定している。埋土は、灰青褐色細粒土層が埋積していた（図203）。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

調査内からは、調査器の輪の板状片が出土している。縄文時代を中心とした時期のものと考えられる。



図202 S D02

S D03

調査地正東部で検出した層である。東西方向に直線的にのびる層である。S D02の東側に位置する。他の遺構との切り合いは認められない。西端は調査区内で保証し、東側は調査区外へのびている。

検出した長さは8mである。検査面における幅は30cmを測り、横断面は圓形をなし、底面における検出面からの深さは13cmである。底面の標高は、西端部でH3.2m、東端部でH3.23mと、ほぼ一定している。埋土は、灰青褐色細粒土層が埋積していた。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

調査内からは、調査器の輪の板状片が出土している。縄文時代前半に検出されたものである。

(2) 土坑

3層検出している。調査区内東部から北東部に向けて伸びている。

S K01

調査地中央部で検出された遺構である。S D01西端の南西部に位置する。他の遺構との切り合いは認められず、定位する。

平面形はほぼ円形をなし、その横幅は50cm×50cmである。横断面は近似円形をしており、底面における検査面からの深さは15cmである。土坑内には、黄灰褐色細粒じき粗粒土層が埋積していた（図204）。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

土坑内からは、調査器の輪が上点（C2）出土している（図205）。口縁部の小片である。

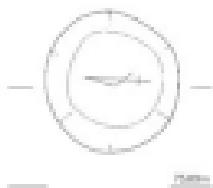


図204 S K01

S K02

調査区東半部で検出された遺構である。S K01の南西部に位置する。S K01と切り合いはあり、本遺構中東部がS K01に切らされている。

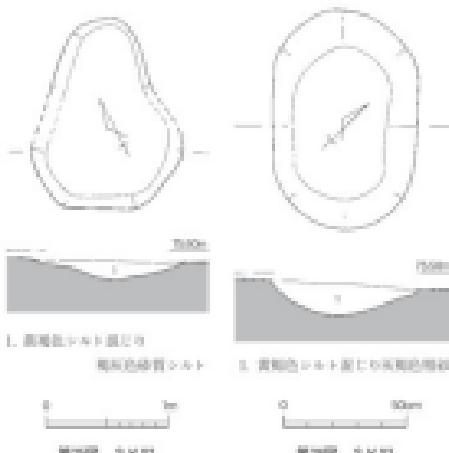


図205 S K01

ただし、本跡は小規模であるため、本道幅全体の埋蔵層等の様子は可視である。

平面形は卵形や歪んだ楕円形をなし、その規模は段階方向で1.5m、その直交方向で1.20mを測る。埋蔵面は圓形をなし、最深部における楕円形からの距離は15cmである。土坑内には、黃褐色シルト層に埋められた黒色砂質シルト層が堆積していた（図208）。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

土坑内からは、遺物層の層が出土している。遺物の小片で、縄文時代前期に埋蔵付けられるものである。小片のため個別化できなかった。



寺内跡

調査区南手側で検出された遺構である。S-N轴の北東端、S-D轴の南西端に位置する。他の遺構と切り合いで開拓は認められず、完存する。

平面形は圓形形をなし、その規模は段階方向で1.5m、その直交方向で1.20mを測る。埋蔵面は圓形をなし、最深部における楕円形からの距離は15cmを測る。土坑内には、黃褐色シルト層に埋められた黒色砂質シルト層が堆積していた（図209）。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

土坑内からは、遺物層の層が出土している。遺物の小片で、縄文時代前期に埋蔵付けられるものである。小片のため個別化できなかった。

(4) 不明遺構

S-XII

調査区中央部で検出された遺構である。S-XIIの南東端に位置する。他の遺構と切り合いで開拓は認められず、完存する。

平面形は圓形形をなし、その規模は段階方向で1.50m、その直交方向で1.20mを測る。埋蔵面は圓形をなし、最深部における楕円形からの距離は15cmを測る。本遺構は、一層埋められた後、2箇所が土坑状に再開削されている。遺構内には、粘質砂質シルト層が埋められていた。再開削部には、黄褐色細粉が埋められていた。いずれも、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

遺構内からは、遺物層の層が出土している。いずれも小片のため個別化できなかった。遺物時代前期に埋蔵付けられるものである。

2. おとこ

頭骨頂中央部で検出された遺傳である。名目100の頭側に位置し、丘頭回頭の方向性を示している。また、名目00の此頭側に位置する。他の遺傳と切り替い頭側は認められず、発育する。

平面形は頭丸頭方形をなし、その横幅は頭側舌側で1.23m、その直角方向で7.6cmを測る。頭側面は頭舌形をなし、頭側面における横頭面からの聞きは31cmを測る。埋土は、黃褐色～灰褐色細胞と褐色色細胞～トルトの2層からなる（図2782）。その頭側から頭側して、人為的に埋められたものと考えられる。

なお、本遺傳については、その形態などから理頭遺傳の可能性が考えられる。しかし、遺傳内の頭側・平面頭側において、本物の頭側を確認することはできなかった。したがって、上記者の可能性が高いものと考えられる。また、名目00とは、方向性を同じくすることから、平行に開拓する遺傳と考えられる。

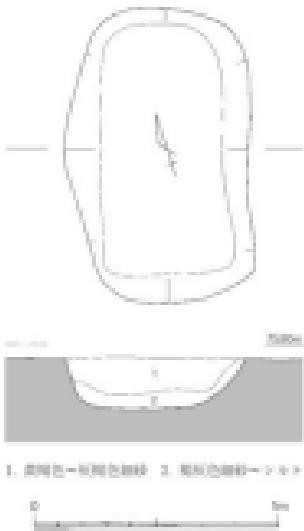
遺傳内からは、土頭面の面（1～10）と頭側面の極が出土している（図2783）。土頭面の面は、7～9の3個体が出土しており、輪郭線により仕上げられている。8は車輪形にあり、9は円形～ラウンド形によく、切り妻されている。9の頭側面テグ膜面により仕上げられ、切り妻しは頭側ではない。10は手づな形面によるもので、頭側に口輪頭内外面が極で調整により仕上げられている。

頭側面の極は頭部と口頭面の小片で、固定はできなかった。頭部は頭側面面に上り切り面されている。

（3）その他の

報告書から、頭側面と頭が接している（頭側面）。頭側面は複数、3個体（10～13）固定することができます。いずれも頭タイプに分類されるものである。

耳は、軽耳足の耳頭の一帯（10）が出土している。耳頭面頭側は、幅2mm～7mmの外縁に開拓されている。耳頭と耳足は、耳頭面は平面頭面を含め、頭側面を接続することで接合されている。耳頭頭側はヘラ形で上り仕上げられ、その厚さは1.3mmである。また、耳足の厚さは1.15mmである。頭側は直行であるが、正面に自然軸が傾いている。



1. 黄褐色～灰褐色細胞 2. 褐褐色細胞～トルト



頭側面・土頭面

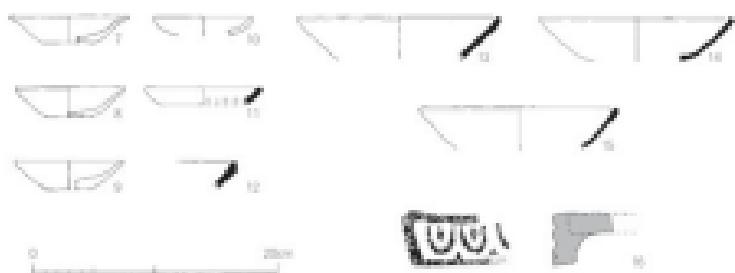


図3-38 A井山出土土器

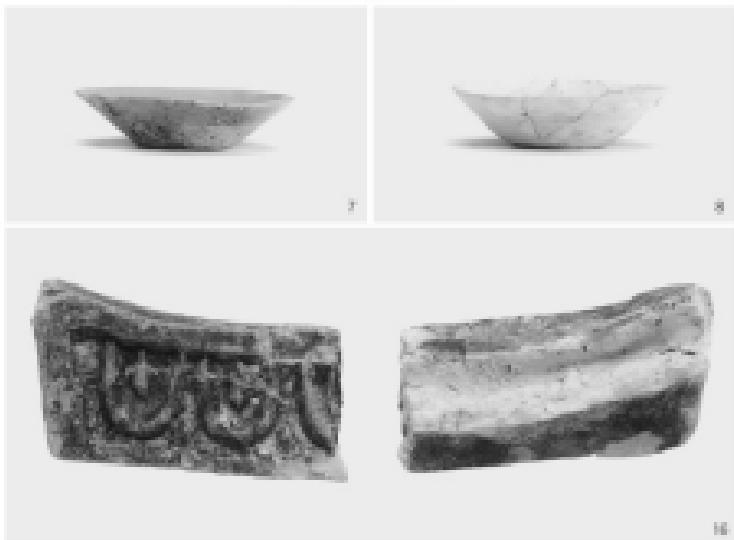


図3-39 A井山出土土器

第2節 日地区の調査

1. 調査

日地区は、大物園の東側各部に位置する。前原4号面積・5号面積の範囲にあたり、以前に行われた調査で、当外側の範囲が明らかとなっている。調査地は以前水田であったところで、和田造成にあたって大きな被害を受けている。このため、被災地の直上まで整地に使った被災された畠であった。したがって、抽出した面（第3回）は、他の地表面もしくは、浸食を受けた面と考えられるが、そのどちらかであるかについては、調査では明らかにできなかった。

以上のような状況であるため、通過は全く検出できなかった（第3回）。また、出土した遺物についても、最終段階が復たれたものではなく、内部の空洞構造と考えられる。つまり、前原4号面積・5号面積底盤の空洞構造と考えられる。



第3回 日地区



第4回 日地区空洞



図3-10 異地山脈

2. 出土遺物

出土したものは、須恵器と瓦である（図の第一類式）。出土品は比較的多く出土しているが、上記の通り内面からの出淤痕跡であることから、断片が多く、組合できるものはほとんど認められなかった。

(1) 須恵器

碗・皿・壺・鉢・瓶が出土している。

瓶は、13～15の口縁部を残すことができた。完形に復元できた個体は少ないが、瓶の底面が内側裡向外にあるものと直腹的なものの、セリニアが認められる。底盤は、いずれも平底台が強化し、平底に近い特徴を示している。

瓶は、20～25の口縁部を残化した。小瓶に分類されるものである。口縁に対して底高が低いタイプ（20）、底ハタライア（22・25）、その中間（23～25）と認定することができる。底盤は、いずれも底盤あぶりにより切り離されている。

壺は、14～16の口縁部を残化した。完形するものではなく、口縁部が残存するものの多くは、内底面をわずかに剥離させている。底盤では明確な平底台見している。

鉢は、20～25の口縁部を残していている。底盤から口縁部まで残存し、口縁に対して深い傾向にある。

皿は、20～25の口縁部を残化した。2種類とも、口縁部内底面が強い傾きでより往上げられている。底盤外縁は明瞭により往上げられている。

(2) 瓦

丸瓦と平瓦が出土している。1つでもかけでの出土である。全て須恵器で、両面にはみ目が認められる。

丸瓦は、底部が埋存するものは瓦葺式に分類されるものである。凸面は弱いへたりもしくはヘラナギにより往上げられている。瓦葺型頭部へたりの強度の調整により往上げられている。また、頭の背面には圓着が認められる。

平瓦は、凸面が頭背部のへたりににより往上げられている。1つゆる埋き面は認められない。厚さは1.20cm前後である。

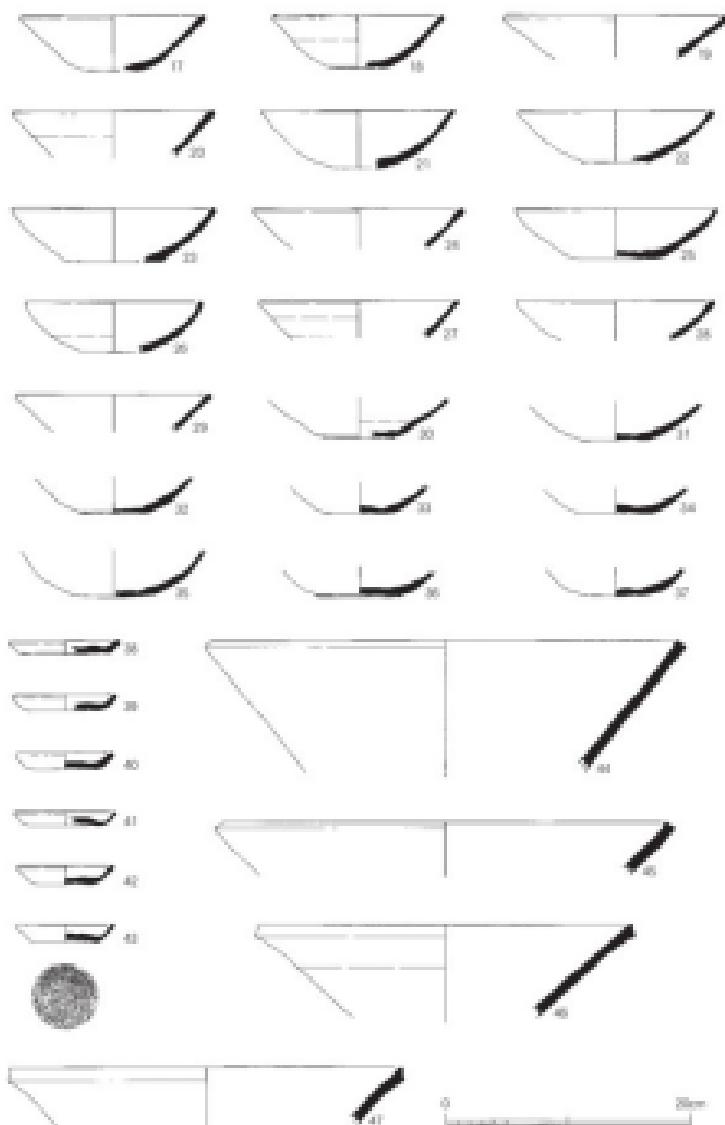


図3-98 球形鏡(土器鏡)II

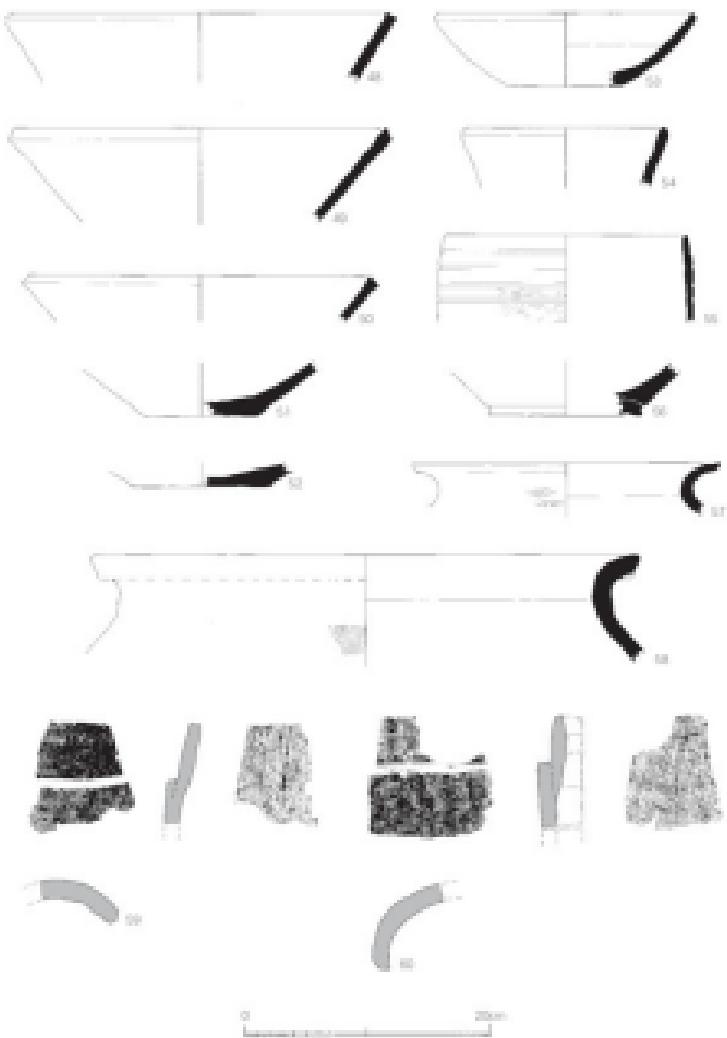


圖 1-2 日本式鐵道土土路(2)

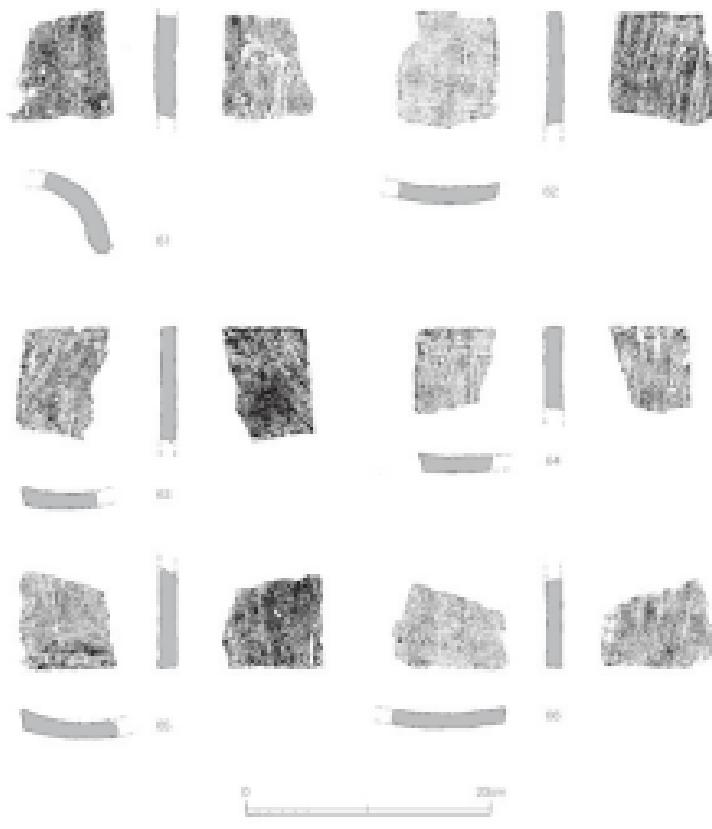
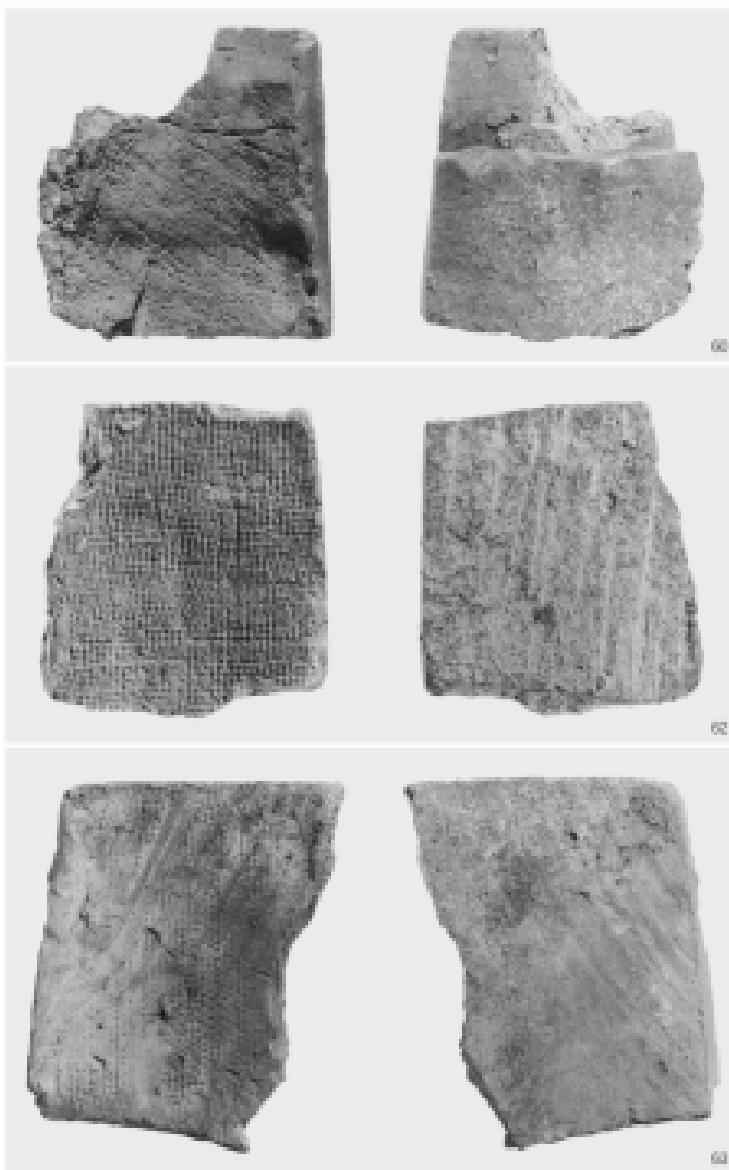




圖 1-1 日施紋の調査



図版四 青銅器土器等

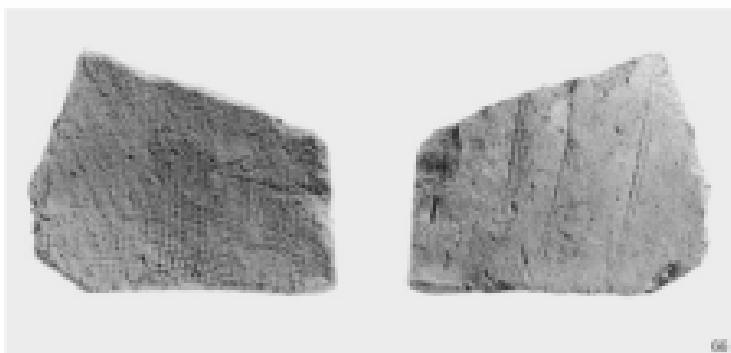


圖 1-10 日本Kの断面

第3節 結論

1. 仕じめ記

調査の実態について、その概要をまとめ、本報告のまとめとしたい。

2. A 地区

施設付樹物・土城・溝状地盤を検出した。出土土壤から植物特徴調査に立派挙げられるものと考えられる。これらの遺構については、切り合ひ開拓が一部を除いて認められないことから、はるか前間に種植していたものと看えられる。

3. 目地区

希望する場所・予定に伴う実際の空地埋積層を検出した。このため、今回報告する箇所は、段階の資料とは言い難いものである。しかし、直隣敷面積であることが再確認することができた。

4. 総まとめ

以上のようだ、A地区と目地区は、活潑しながらも立派・その内面が大きく異なる。しかし、時期的に共通したことから、目地区は有機的な開拓にあったものと考えられる。目地区は、後期の空地埋積層であることをから、A地区はこの他の種類に属した工人の施設の可能性が考えられる。しかし、A地区では、いわゆる磚塊ビット等の遺構や、出土物等、遺跡調査作に準るものは検出されなかった。

報告書抄録

上り下り	上り直進した後左側を直進してから、左折して左へ。						
地名	内野西崎道跡発掘調査報告書						
調査名	主要街道三本(三河街道改修事業)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
施設							
調査実施者名	日揮新文化財調査委員会						
調査実施年月	第30回						
監督者名	山田清輔・鶴 真記						
監督機関	長崎県立考古博物館						
調査場所	佐古郡福富町丸子1丁目1番1号 TEL.095-827-0589						
発行機関	日揮新文化財調査委員会						
調査場所	〒850-0867 長崎市中央区下山手通5丁目10-1 TEL.095-823-3781						
発行年月日	2001年(平成13年)3月29日						
所轄道路名 (既設既存可)	新直轄	新直轄	既存	未調査	調査確認	調査実績 (回)	調査範囲
内野西崎道跡 (2000-78)	三本道 北側 西側	2001年 2002年 西側	2002年 47 57	34° 47° 57°	100° 0° 57°	平成13年 11月20日～ 12月14日 新直轄	(主)内野西崎道 跡改修事業
所轄道路名	種別	主な時代	主な遺物		主な遺物		既定事項
内野西崎道跡	聖蹟路 城跡	縄文時代	福富村縄文・須・土坑		福富町・才田町・瓦		
調査要	A地区とB地区の主査は各調査。占領時代は、福富町内福富地区付近の植物群、構造遺構など全般。B地区では、石原・井原・赤坂地区の主査が各自調査を調査。B地区については、福富町等、各地区を複数に開拓した人間の可能性を想定しながら、高見山、才田半島付近の複数箇所を調査された。						

兵庫県文化財調査報告 第2000号

三木市

吉田西向遺跡

兵庫県三木市西向遺跡発掘調査報告書 第2000号

平成29年3月21日施行

図 画 兵庫県立考古博物館
〒663-0143 加古郡播磨町大字1丁目1番1号

文 行 兵庫県教育委員会
〒660-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

印 刷 梶武堂社 リエイ
〒663-8888 明石市難波町8-6
